

びわ湖をフィールドとした環境教育の現状と展望

滋賀大学大学院教育学研究科学校教育専攻環境教育専修 藤本 祐矢

1. 研究目的

本学では、びわ湖から環境マインドを育むため、これまで長年にわたり本学所有の調査艇「清流」に乗船しての「びわ湖体験学習」を実施してきた。びわ湖を五感で感じ、自然現象を肌で感じることの重要性を教えることに役に立っている。また、湖という水環境のすばらしさを体感することによって、環境問題に対する取組方がより真剣なものになっていく。

本研究では、びわ湖をフィールドとした環境教育の実践を行っている施設や団体に出向き、それぞれの活動を体験、見学などをした。それぞれの体験活動を通して、子どもの様子や話、活動内容等を調査し、現在のびわ湖をフィールドとした環境教育の現状をまとめ、より一層びわ湖を体験する学習の発展を願うなど今後の展望について考えた。

2. フィールドとした体験学習の実践例

びわ湖をフィールドとした体験的な学習は、滋賀大学教育学部をはじめ、様々なところで行われている。個人で登録して行っているものを合わせると多数あるので、各施設が行っている、びわ湖をフィールドとした体験学習に焦点を絞って、調査を行ってきた。図は、びわ湖をフィールドとした体験学習を行っている施設マップである。各機関の体験学習の現状を活動内容、実施頻度・学習者数、評価等についてまとめた。



図:びわ湖をフィールドとした体験学習を行う施設マップ

3. 結果・考察

びわ湖をフィールドとした体験学習を調査・体験した結果、どの学習機関もびわ湖を守りたい、発信したいという強い思いを共通して持っている。さらに一年間にびわ湖を体験する学習を行った人数の合計は上記しただけでも年間4万人以上になり、これだけの人々にびわ湖を感じてもらっている。しかし、機関によっては事前指導、事後指導が必ずしも十分ではなく、各団体や学校に任せていたり、滋賀県による情報提供が県の機関に偏っているというのが課題で上げられる。また、滋賀大学教育学部が行っているびわ湖体験学習は、高度な機器やグラフ提供を行っているため、科学的な側面からも学習でき、事後指導も行いやすいことが認識できた。

4. 展望

- それぞれの機関の特色を生かした体験学習の実施と相互の情報共有
- 各機関での事前・事後指導の充実、各機関との連携や発達段階に即した体験学習
- 滋賀大学「環境学習支援士」の充実と現場での活躍
- びわ湖をフィールドとした体験学習に関する情報提供の拡大